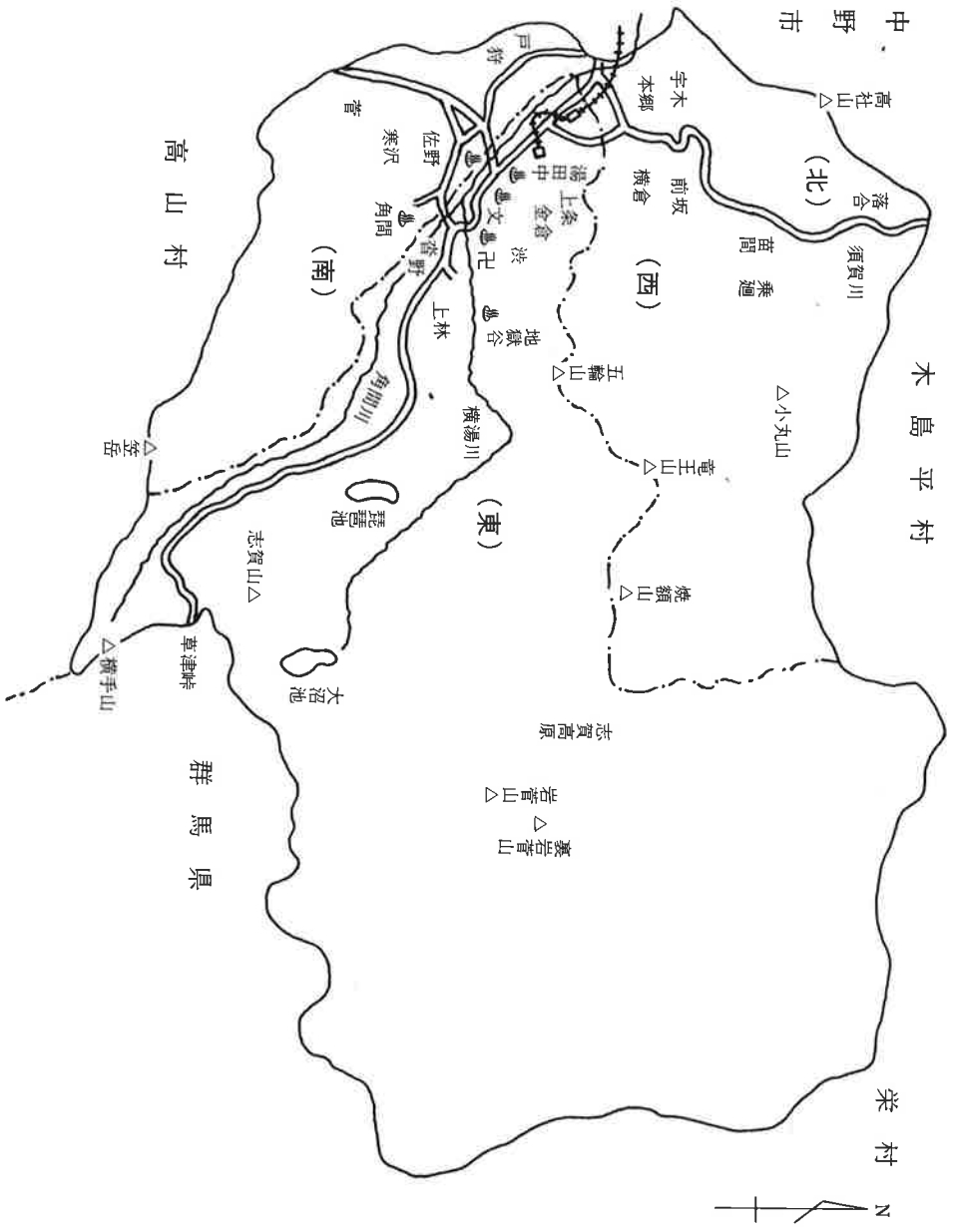


第一章 町のすがた

山ノ内町概図



## 一 自然

山ノ内町は、長野県の北東部に位置し、西は高社山（二三五二メートル）を境として中野市に隣接し、北は焼額山・竜王山に囲まれた高原を壁にして、下高井郡木島平村や下水内郡栄村に続く。南には奇峰笠岳（二〇七五メートル）や噴煙を上げている白根山を間近に据えて、上高井郡高山村や群馬県の西北部に接している。

また、東はこの近辺の最高峰の裏岩菅山（二三一九メートル）や、烏帽子岳を挟んで群馬県吾妻郡と県境をなしている。広袤（びょうまう）東西三九〇メートル、南北一二〇メートルで、山岳地帯は自然の宝庫である志賀高原、上信越高原国立公園に指定されている。この山岳地帯を横湯川・角間川の清流が、奇観の渓谷を刻み、その間に大沼池・丸池・琵琶池・蓮池などの幽邃（ゆうすい）美麗な湖沼が、著名なものだけでも二〇以上も周囲の自然の美を映じて散在している。

大原始林が四季それぞれに模様替えをして観客の目を楽しませ、高原地帯から麓の平坦地の温泉街へつながって湧出する湯量の豊富な出で湯は、古くは鎌倉時代の昔から湯治客の心身の疲れを癒（い）してきた。

避暑の夏季と、新緑（しんりょく）錦繡（しんきゅう）の春秋と、世界的に有名になっているスキー場の冬季の四季それぞれの魅力にひかれて足を運ぶ来訪者は、県内五指に入る数に達し、ますます将来性を期待されている。

## 二 歴史

山ノ内町には、一万年以上も前の旧石器時代から人が暮らしていた

ことが知られているほどその歴史は古い。縄文時代に入ると、本郷の伊勢宮遺跡や上条遺跡などに、縄文式の石器・土器・住居跡などが発掘されている。特に佐野遺跡からは、中部地方の縄文晩期の標識とされている三叉（さんさ）文等を主文様とする佐野式土器が発掘されている。

中央とのつながりでは、高井地方から健胃剤に用いられた大黄などの薬草が朝廷へ献上されていたことは、奈良時代から平安時代にかけて行なわれていたことが分かる。また、平安時代の中期からは、現在の山ノ内町および中野市の高社山麓一帯の地域には朝廷の御牧が存在していた。その広大な地域は日野郷と称せられていた。

鎌倉時代の武家政治が始まると、山ノ内にも武力を持った新しい勢力が台頭し、南北朝・室町時代には、この地方は北信の豪族高梨氏や、山ノ内の夜交氏、小島氏などの支配下におかれた。しかし、これらの豪族は、上杉氏の家臣となってこの地を治めたが、上杉氏の会津への転地によりこの地を去った。

その後、山ノ内の各村では領主の交代が頻繁に起こり、元和八年（一六二二）には、徳川家直轄領（天領）と真田家（松代藩）の二つに統合されて落ち着いた。そして、この二つの領主の系統が明治維新まで山ノ内の各村を支配した。

この各村は、明治二二年の市町村制の施行で、佐野村、寒沢村、戸狩村の三村が合併して穂波村となり、山ノ内は、平穏、夜間瀬、穂波の三か村によって構成された。そして、昭和三〇年四月に一町二か村が合併して今日の山ノ内町となった。

## 三 交通

山ノ内町の交通は、湯治を主とした関係では古くから開かれていた

が、北国街道や谷街道の主要道路からは脇にそれていたため、その発達は遅れていた。

しかし、草津道の利用によって関東地方との交通を考えるようになってからは、徐々に利用する者が多くなり、特に観光方面からの開発ではそれに拍車をかけるように開発が進んできた。

ここで、以前からのものを概観すると、外部との交通で主な通路は大別すると三筋になる。

### 1 飯山・岳北方面へのもの

湯田中—上条—本郷—宇木—深沢（中野市）—赤岩—岩井—木島平方面—千曲川渡船—飯山

この交通路は、近世初期あるいはそれ以前からあったもので、これが飯山から富倉峠を越して、新潟県の新井、高田、直江津方面へ延びており、主に海産物の移入に利用されたものである。なお、本郷、宇木を通らないで須賀川を経て、高社山の裏通りを木島平へ出て飯山方面へ行く脇街道的なものもあった。ここには、石仏では「とりで街道の観音」三四体がその名残を物語っている。

### 2 中野村、善光寺平方面へのもの

この交通路は相当古くからのもので重要なものであったが、大体三経路に分かれていた。

#### (イ) 佐野村—寒沢、菅—更科峠 更科（中野市）—小布施—長野市

現在でもこの通路の更科峠には、当時の面影の偲ばれる石神、石仏が残されている。

#### (ロ) 戸狩村—箱山峠—松川村（中野市）

この道は、中野市へ行くには最も便利な道で、最近まで盛んに使われていた。

#### (ハ) 本郷—夜間瀬川—栗和田（中野市）—松川村—中野村

山ノ内町の南部の人たちには、この道が比較的平坦で容易な行路

だったので、近世初期には利用されることが多かった。

このほか、菅から上高井の山田村方面に通ずる山田峠越えの山道もあり、通路には古い多くの石造物が所々にある。

### 3 上州方面へのもの

長野県ではこの通路を近世においては「草津道」と呼んでいたが、善光寺平北部と草津温泉、さらに前橋市へ、そして江戸へと通ずる近道として利用されていた。この道筋には、ここを通る人々の安全を祈るための「峠の観音」や、その他の石神石仏が多く建てられている。

草津道は長野県側からの使用でなく、草津側の方では、「沓野道」「沓湯道」等と呼ばれていて、文政年間以後からは関東地方北部からの交易・交通にも盛んに使われていた。

そして、草津街道の全盛期に入ったのは明治以後であったが、その後信越線が開通したり、草軽電鉄が出現して一時衰退した。

しかし、「志賀高原ルート」によって再現され、観光の脚光を浴びて全国的に著名になってきた。さらに現在は冬季オリンピックの長野県招致により、スキー回転競技の会場となった志賀高原の発展は、今後ますます期待されるところ大となった。

## 四 文化

山ノ内町の文化の発展に影響を及ぼした人々は、陰に陽に、また大に小に直接的、間接的に様相は種々であるが、その自然面と観光面と人情面にひかれて訪れた文化人に負うところが大きかったことは見逃せない。

たとえば、小林一茶はこの地の多くの弟子たちの熱意ある招請に応じて幾たびか来訪して逗留してあり、渋温泉のつばたや旅館、古久屋

旅館や、湯田中温泉の湯本旅館などに滞在して句作をしたり、当地や近辺の弟子の指導をしている。そのさいの主な俳句は、当地の有志が石碑としてところどころに建てている。

幕末の先覚者佐久間象山は、弘化元年（一八四四）に佐野・湯田中・沓野三か村の松代藩の利用掛となって、この地の殖産興業に努め、特にこの地の人情風光に心をひかれて地域のために力を入れている。この地域のことを書いた「鞆野日記」などは、象山の随筆として貴重なものである。

その他、古いころでは、俳諧はいかいの始祖の一人者宗祇も来訪されたといわれており、現在まで日本の各界の著名人の来訪は数知れずである。この間のことは、山ノ内町中央公民館で発行した『志賀高原を訪れた文化人』の本の中に記されているが、これによると、数軒の旅館の宿帳によるだけでも八百人以上に達している。

これらの人々の足跡や記されたものの一部が石碑となって残されており、信仰面での石造文化財となっているものが、この著書に載せてあるものでも、その数が一一九八体になっている。